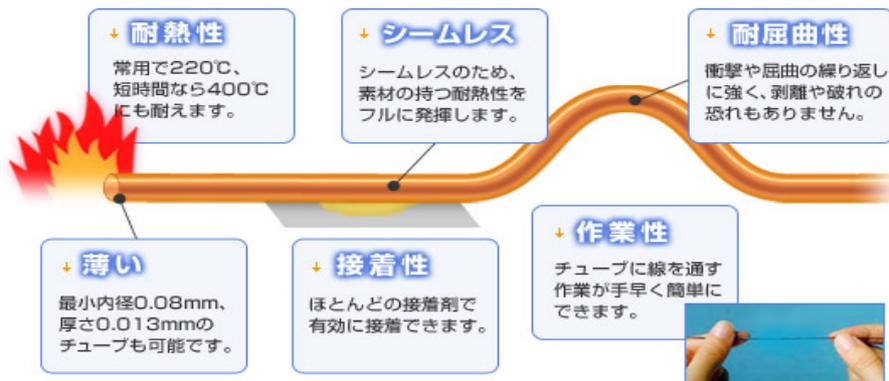


ポリイミドチューブの特長



耐熱性



周辺温度約300℃の炎に1分間かざした状態。早くも右側のフッ素系樹脂チューブは軟化し始めていますが、左側のポリイミドチューブには変化が見られません。

古河ポリイミドチューブ	フッ素系樹脂チューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
常用で220℃、短時間なら400℃にも耐えます。自己消火性を備え、有毒ガスを発生しません。	200℃前後から熱分解を始め、高温で軟化。フッ素ガスを発生する。	接着剤の特性による(一般的に接着剤は熱によってはがれやすく、また有毒ガスを発生するものもある)。

シームレス



周辺温度約300℃の炎に1分間かざしたスパイラルチューブ。接着剤が溶け出して剥離しています。古河ポリイミドチューブはシームレスなので、このようなことはありません。

古河ポリイミドチューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
シームレスのため、素材の持つ耐熱性をフルに発揮します。	接着剤の特性による(一般的に接着剤は熱によってはがれやすい)。

薄肉



どちらも内径1.0mmの、ポリイミドチューブとフッ素系樹脂チューブを各々15本束ねたもの。同じ内径でも、肉厚がこれだけ違います。

古河ポリイミドチューブ	フッ素系樹脂チューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
引っ張りに強く腰のある樹脂ですから、 最小内径0.08mm、厚さ0.013mmのチューブも可能です。 微小部分の配線に威力を発揮します。	内径1mm以下、厚さ0.2mm以下は不可。軟らかく引っ張りに弱い。	内径0.4mm以下は不可。

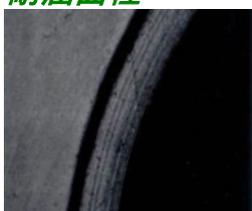
接着性



ポリイミドチューブに接着剤を適用したところ。このように簡単かつ有効に接着できます。

古河ポリイミドチューブ	フッ素系樹脂チューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
ほとんどの接着剤で有効に接着できます。また、アルカリ以外の薬品や放射線にも強い特性を持っています。化学工場、原子力発電施設などでの用途も期待されています。	接着剤は使用困難、また放射線にも弱い。	接着剤の特性による(接着剤には薬品や放射線に弱いものが多い)。

耐屈曲性



古河ポリイミドチューブの断面写真。この多重構造が耐屈曲性の秘密です。

古河ポリイミドチューブ	フッ素系樹脂チューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
上の断面写真のように、特殊な多重構造になっています。このため 衝撃や屈曲の繰り返しに強く 、剥離や破れの恐れもありません。可動部分でのご使用にも安心です。	衝撃で樹脂表面が欠損しやすい。	接着部分で強度が低下し、衝撃や屈曲によって剥れやすい。

作業性



フッ素系樹脂チューブとポリイミドチューブとの線通し作業性の比較。フッ素系樹脂チューブは先が曲がりやすく、滑らかに線が通りません。

古河ポリイミドチューブ	フッ素系樹脂チューブ	スパイラル巻きポリイミドチューブ
腰が強く、滑らかで摩擦が少ない表面を持つため、 チューブに線を通す作業が手早く簡単にできます 。また、優れた耐熱性はハンダ付け作業にも安心。ハンダやハンダごてでリード線被覆を溶かしません。	表面摩擦がやや大きく、腰が弱い。そのため、1クラス太目のチューブが必要。	接着部分で引っ掛かりが発生しやすい。